

場面緘黙症児のことば・からだ

河野文光

Words and Body of Children with Selective Mutism

Bunko Kono

要旨

本論は場面緘黙症児が臨床動作法（成瀬，1995，2000）でのやり取りで，ことばを発した事象（河野，2001）について検討している。セッションで「ウー！」という有声音に続いて、「痛い！痛い！」とことばを発し，＜どこが？＞という援助者の問いに，「ここ！」と腰に手を当てて応えたA男（小学校2年生男子）は，その後の援助者とのやり取りでもことばで応答するようになり，暫らくして学校でも喋るようになる。

A男の課題は，現実的な生身の人間との間の中で，過敏な緊張感や攻撃的感情，自己の内部に押し込めていた感情や不安感をセラピーの中で表出しても安心であるという，現在只今と此処での動作体験が必要であると援助者は見立てている。

A男は，指示された課題に応じて力を抜く体験，人前で構えているからだの緊張を能動的に弛めることによる主動感や，援助の意図がわかって，自ら課題達成の努力をしながら現実検討の体験をしている。勝手にスイッチが切れるという自動感としての緘黙が，主動感・能動感で喋るように変容した事例から，ことばとからだの一体性について動作でのやり取りから考察している。

キー・ワード：場面緘黙症児，ことば，からだ，動作体験

I はじめに

1) 事例の概要

小学2年生になるA男は，4歳ころから家の外では話さなくなるという場面緘黙症状を呈している。幼稚園では，大人しい子として評価され，特に緘黙のことを指摘されることはなく，そのまま小学校に入学している。小学校に入っても暫くはそのまま見逃されていたが，何度も音読や返事が口形のみで音声を伴わないことや，首を動かして挨拶に代えていることに不審を感じた担任により指摘されている。その後，学校の紹介で公的機関での母親同伴の相談が始まる。X年1月からX年7月までの6回の相談は，公的機関の所員が面接を担当され，プレイルームでの関わり遊び（ドッ

ジボールやボール投げなど）や筆談によるコミュニケーションを通した関わりをしている。

都合により，X年8月からX年+1年1月までの間，計15回に亘り援助者として筆者が担当している。その間，第9回～第20回までの間で，計5回に亘り面接に臨床動作法を取り入れた。その内の第10回において，『軀幹捻り』の課題援助をしているとき，「ウー」という，痛みに対応したと思われる有声音を発し，援助者の＜痛い？どこが痛い？＞という声掛けに対して「ここ！」と自然にことばで応じ，これを契機にして援助者とのことばによるコミュニケーションが成立している。プレイルームでの関わりも活発になり，学校生活でもことばで応答するようになった。

面接は，A男と母親（途中，父，祖父も含む）

の双方を援助者が一人で担当する。A男に対しては、プレイルームでの関わりが主で、ボール投げや箱庭作り、自由描画、腕相撲など、A男の多彩な思いつきの内容に援助者が連れ沿う形で始められたため、臨床動作法単独での施行事例ではないが、本論では臨床動作法施行の部分に焦点を合わせた論述をする。

2) A男と家族の概要

10か月の熟産で、普通分娩、生下時2500gの体重である。幼児期にオマルでのうんちを嫌がったため、祖父母が新聞紙を敷いてそこにやらせていたと母は言う。何かにつけて祖父母が溺愛し過ぎた。3歳ころは特定の近所の子と遊んでいた。幼稚園では皆に打ち解けて遊べなかった。連れて行くと集団の中には入れたが、普段は粘土や絵本などの一人遊びが多かった。何か他人の目を気にしている様子で、ほとんど喋らず、「はい」「さようなら」を言う程度であった。母はくどうして喋らないの！ちゃんと言いなさい！>と叱ることがあった。また、4歳ころA男が「近所に遊びに行く！」と祖父に告げたときに、祖父から叱られ、それから暫くは外での遊びをしなくなったという（以上、母親談：第7回インタビュー時）。

初めての内孫で可愛かった。家の木に蝉が止まったので、祖父が捕ってやろうとしたら、<蝉くらい自分で捕まえなさい！>という母の横槍が入った。何かにつけて祖父母を孫から遠避けようとしている。A男が祖父母の部屋に遊びにくると、決まって部屋に付けてある連絡用のベルを母親が鳴らし、A男を連れ戻そうとする。A男が可哀想だと思い、その後はA男に関わらないようにしてきた（祖父談：第17回時）。

前担当者による教研式知能検査（SS, 50）、人物描画（IQ108）。家族や近所の友達とは普通に会話をしており、家族は、小学校に入学して担任に指摘されるまでは緘黙症の疑いには気づいていない（前担当者からの情報）。

家族構成は、厳格で几帳面な神職（以前は公務員）の祖父、18年前に脳卒中を患い言語障害になっている祖母、次男で末っ子でありながら家を継いだ父、よく喋り勝気な感じの母（商売屋の長女として育った）、2歳年下の妹（保育園年長児）の

6人家族である。祖父母とは同一敷地内で棟違いの生活をしており、親戚付き合いや知り合いの人との交流をあまり好まない祖父と、寡黙な祖父母や夫の家族を辛気臭いと感じている母との間で、子育てから生活習慣に至るまで様々な意見の対立がある。易を信じる母親は、時機を見て祖父母との別居を考えている（母親談）。

A男は、「僕はどんなに偉い先生でも喋らないよ。」と面接への構えを示し、父は、<お前は、お医者さんでも治らん。家を出るとスイッチが切れてしまうなあ。>と言っている。『スイッチが切れる』ということについて、A男も同じ気持ちでいるとのことである（父親談：第8回）。

3) 動作概況

初対面（#7）の時に、母親の背中に隠れるように付いて来る様子からは、肩や胸・背に慢性緊張が入って、気持ちが内に籠もり外に向きにくい心性を感じさせる。

一方、ずんぐりとした体形で、歩行や走る様子、坐位姿勢からは、特に左右差を感じさせる偏りは見当たらない。ボール投げも上手でバランスがとれている。胸が厚い感じで、肩周りはガチッとしている。自転車のペダル漕ぎも快活で、運動神経は良さそうに見える。タッピングの様子からは、手指の巧緻性も高そうである。

肩周りに慢性の筋緊張が入り易く、少し肩が上がり気味である。仰臥位で頸を弛めようと援助すると逆の窄める力を入れてきたり、肩弛めや肩反らせをしようとして、両肩を上挙げるように援助したり反らせるように援助すると、くすぐったいのか頸を窄めるように力を入れてくる。触られることに対する過敏さが感じられる。

軀幹部は胸の厚さもさることながら、慢性緊張が入っている。立位姿勢ではやや出尻で、腰が少し反り気味である。軀幹部と併せて、股周りの慢性緊張を予測させる。『軀幹捻り』の動作課題では、セッション中に「痛い！痛い！」と声を発するほどで、軀幹部も股周りも硬い。

II 見立てと面接方針

緘黙症は、広義にはことばを発せない状態を指

し、心理的要因によるものは心因性緘黙症と呼ばれ、心理機制としては場面に対する不安を回避するために、緘黙症状を呈する一種の自己防衛反応と考えられている（西部，1992）。また出現場面によって、状況に関わらずまったく発話が見られない全緘黙と、状況によりある場面では緘黙となる場面緘黙に分けられる。全緘黙は症例も少なく言語能力の有無の判断も難しいと言われている（川崎，1992）。

心理臨床で問題となるのは、選択性の場面緘黙である。西部（前掲）の言うとおり、場面緘黙の多くが、学校などの緊張感が高まる場所では、ことばの疎通性を欠くだけでなく、他の子どもたちと一緒に何かをする場面では後からついて行くような消極的参加が多いと言われる。ただし、不登校児のようにその場面への参加を取り止めたりはせずに一応の出場をするという意味では、心理的な健康度はまだ高いと言えるし、近所の友達や家族など、良く知っている内輪の活動ではまったく正常なことばのやり取りを含めて、A男のように元気そのものである場合が多い。したがって、緘黙が判明するのは家庭外の保育園や学校などの緊張場面で指摘されることがほとんどで、家庭で判明する事例は少ないようである。

緘黙児は、身体が緊張して、こわばったりすることなどから、単にことばだけではなく、行動を含めた広い意味でのコミュニケーション障害であることが示唆されている（大井，1979）。原因論に関しては環境因の立場が多く、症状が外界からの刺激に対する自我の防衛反応に由来するという見解が本邦では主流であった。したがって援助に関する見解も、緊張感を和らげる援助空間を作って相談者とのラポールを大切にしたいとする考えが中心である。これは緘黙をコミュニケーションの問題としてとらえる視点と整合するものであり、発語の問題ではなくコミュニケーションする力の問題としてとらえる考え方である。

緘黙研究の動向については、角田（2011）が海外の研究も踏まえてまとめている。それによれば場面緘黙の発生を決めるのは子どもの意志ではなく、（そこにいる）人、場所、（求められる）活動、という三つの要素で構成される『場所』であると

している。また場面緘黙の概念もDSM-IVを引用し、意欲・動機づけに関する障害から、不安に関する障害へと転換されてきているとしている。

A男は、父が評するように＜おまえは、外に出るとスイッチが切れてしまう＞という自動感（勝手に自動的に喋るスイッチが切れるという感じ）に共感しており、また面接に行くに際し、「どんな偉い先生でも喋らないぞ」という自動感も持ち合わせている。つまり意識的でも有り、半意識的・無意識的でもある。これらは、A男の体験様式そのものの謂いである。A男に限らず、我々は意識的でも有り無意識的（半意識的）でも有る、ことばや行動および動作で生きている。後からそのことばや行動および動作をなぞれば、それは意識的でもあると言える。

視点を変えて、人の行動やことばを動作という原初的な見方で評すれば、それらはすべて『からだ』で動き『からだ』で在る、つまり動作で生きていると言える。喋るという動作も、喋らないという動作も、意識・無意識（半意識）に関わらず動作である以上、『からだ』が動作して生きている。

臨床動作法の考え方は、精神分析や分析的心理療法のように症状の発現している過去の体験内容は特に問わない。むしろその症状を、今呈している現在只今、此処の場所での体験様式を扱い、しかもその体験様式が『からだ』の動作にそのまま現れるという仮説に立っている。

周囲からの脅威に対して、逃げようとしているのか、じっと構えて脅威が過ぎ去るのを我慢しているのか、脅威に抵抗しようとしているのか、はたまた、うまく回避する算段を見計らっているのか、迎合してしまうのか。

それを『からだ』の動作で見ると、援助者がある動作課題を与えて、『からだ』の緊張（弛緩）の仕方や動作の仕方を見ていく。動作課題としての援助者の他動抵抗に対し、A男は強烈に反発して力を入れてくるのか、仕方なしに受け入れるのか、援助を受け入れ、自らも積極的に動かそうとするのか等々である。その援助のやり取りは、『からだ』を介した援助者とA男との動作による相互のコミュニケーションでもあり、双方の思惑

やその時々々の意図がそのまま『からだ』の力の入れ方（抜き方）や動作の仕方となっている。もちろん、課題に沿っての流れで推移するので、そのやり取りはコミュニケーションの推移でもある。そこには相手（相手の気持ち）を知ろうとする意図も働かし、試しに力を入れたり（抜いたり）する試みも含まれるだろう。こうした相互のやり取りが進むにつれて、A男は援助者の意図を察して援助に合わせようとする動きを見せるようになり、援助者はA男の対応の仕方を予測したりする双方向のやり取りがスムーズになっていく。

したがって、今まで頑なに閉ざしていた自らの構え緊張を弛め、援助者の意図に合わせようとするA男の主体性がセッション場面で発現するようになれば、それはA男のコミュニケーションの基盤である関わり合う力の高揚に繋がり、A男が生きていく主体の強さや生きていく幅を自ら広げることに繋がるのではないか。これが援助の仮説であり、A男の見立てである。

なお、面接方法においては、臨床動作法の技法のみを押しつけるのではなく、前任者が行っていた（というよりA男が思いつきで始めた）様々な遊戯療法について行くレポートの取り方で進め、本人の意向を確かめながら臨床動作法を紹介していく。また、初回面接での母親の発言内容から、家族の問題が背景にあることは予測される。しかも母親が家族の問題にかなりのウエイトを置いて話されることから、他の家族の方にも来談していただくことを母親に伝えている。

Ⅲ 面接の経過

1) 経過

※#6までは前任者が担当されているので省略する。

#7<X年8月7日>:

母親に連れられて、その後ろから隠れるようにA男が入ってきた。やや小太り気味ではあるが、普通の少年のように感じた。<こんにちは！>と声を掛けしたが、下を向いてしまった。暫くしてプレイルールでの慣れた遊びを自分で始め出したので、一緒について行くと、援助者を受け入れてく

れている感じで特別変わった様子はなかった。話しかけに対しては、頸で肯くか頸を振って応答してきた。むしろ快活な少年が、ただ喋らないだけという感じであった。ボール投げ、箱庭作り、自転車のペダル漕ぎ、白ボードへの自由画遊びなどの活動に援助者が連れ添う形で推移する。プレイルームでは慣れている感じで、気の赴くままに活動している。A男との関わりした後、母親との面接をする。

<母親面接>

家族構成から話を聞く。あまり隠す様子もなく家庭内のもやもやした事を一気に話してくれた。

緘黙については、担任から聞かされ驚いた。周囲が返ってそのことを問題にして言い過ぎたきらいがある。本人にはマイナスだったと反省している。

祖父母との別居を考えている。自分の生き方とは馬が合わない。ただ、今は易の運勢が悪い。

#8<X年8月11日>:

父と妹の3人で来談。ビニールバットでボール打ちの遊びをする。真剣になってやっている。いろいろな問いかけには応えなかったが、表情は和らいできている。固定自転車のペダル漕ぎで、スピードメーターを測り、援助者に負けまいと必死で漕いでいる。次にタッピングの道具で記録に挑戦する。その後で、白ボードにマジックで何やら描き出した。怪獣のようでもあり、漫画のキャラクターのようでもある。

今日はこの後、皆で海水浴に行くとのことで、15分くらいで一緒の関わりは切り上げ、妹とプレイルームで遊んでいた。援助者はその間、父親と話しをした。

<父親面接>

大人しく、聞かれたことしか話さない父で、母親とは正反対である。

A男は外で喋らない分、家では短気で威張っているとのこと。時々、妹をいじめている。授業参観に行ったら、別人のような無表情で驚いた。構えているという感じだった。

途中でA男が入って来ると、父は<これから何処へ行くか先生に話してごらん。>と発語を促すが、口形だけ「うみ」と作った。

9 <X年 8月25日>：

援助者が、<今日は準備体操をしよう>と誘うと、すんなり肯いてマットの上に坐った。A男を仰臥位にさせて、各部位の緊張を確認しようと、『頸のリラクセーション』から始める。A男も何をされるのかという不安感からか、頸の後ろはやや力を入れている感じがした。<力を抜いてごらん！>と、援助者が後頭部に当てた手を手前に引くように（A男が反り気味にしている頸を伸ばす方向に）すると、A男もわかったようで、スッと抜いてきた。

次に『軀幹捻り』を行う。援助者は、A男を左向き横臥位にさせて、臀部をブロックして支点とし、右肩部をマットに向かって押し下げのように援助しながら、胸や背中及び腰部の緊張を確認しようとした。見かけ上はあまり感じなかったが、胸や背中中はガチッとした感じで、ほんの僅かしか力を抜こうとはせず、あとはそのままよくわからないという感じで止まってしまっている。

腰部や臀部の緊張を見ようと、援助の手を少し下方向（臀部・腰部）にすると、痛みがあったのか援助者の手を払いのけようとした。「ウー」と声を出しそうになる。そこから先は意識して声を出さないようにしている。この子は喋り出すのではないかと、そのとき援助者には感じられた。

<今度は痛くないから>と言って、足首の弛めを行った。指示に従ってゆっくり足を蹴ったり、力を抜いたりすることができた。その後、坐位での肩弛めを行う。肩を触ろうとすると、急に両肩を窄めるように力を入れてきた。<くすぐったいの？>と聞くと、頭で肯いた。それでも、上げ気味に入れていた力を抜いて、援助者が求める肩反らせ方向に肩甲骨を動かし、援助方向に付いてくる感じで動かしてきた。少し経って援助の手を弛めながら戻し、<どう？肩の感じは？>に対して、頸を傾けるようにしながら肩の感じを確認しているように見えた。

10 <X年 8月28日>：

A男、母、妹、A男の友達（兄弟二人）の5人で来所した。友達の兄は一つ年上で、この兄弟と3人でいつも遊んでいて、普通に話ができていう。夏休み中であったため、友達を連れてき

ても良いかというA男の希望を受け入れて、プレイルームは子供たちの遊び場になった。トンネル潜りやお店屋さんごっこ、自転車などで3人が元気にはしゃぎ回って、A男も普通に喋っている。20分くらい3人が自由に遊んだ後、一人ずつ自己紹介をしてもらう。A男は再び黙ってしまう。

その後、準備体操だと説明して、一人ずつ『軀幹捻り』をした。友達の兄から始めたが、「痛い！痛い！」と言い出した。A男は前回もやって知っていたので、友達の弟に目配せをして逃げ出そうとした。<だめだよ。逃げ出しちゃ>というと、笑いながら戻ってきた。弟の『軀幹捻り』をした後、A男の番になった。横臥位にさせると少し緊張した表情になったが、肩に手を当てると観念したように元の表情に戻った。少しずつ援助を加えて捻ろうとすると、「ウッ！」という構えのような声を出した。<だめだよ。そんなに力を入れちゃ>と声掛けをして、再び肩を押し込むように援助をする。スーと肩や胸、背の力を抜いてきて上半身が回転するように自分で力を抜いてきたかと思ったら、「痛い！痛い！」とはっきり声を出した。すかさず、<どこが？>と聞くと、腰に手を当てるように動かして、「ここ！」と応えた。

それ以降は、援助者との間では普通に声を出して喋れるようになった。

※その後は#18まで動作法は行わず、今までの自由遊びを主としたA男主動型の面接で推移したが、この間に母親、祖父の面接が入った。

#12での母親面接では、この家に嫁に入ったいきさつや、祖父母の辛気臭い性格、この家の古いしきたり等々で自分とは馬が合わないこと、自分の家は商売屋で多くの人が入出入りし、親戚や兄弟付き合いも頻繁であるのに対し、この家はまったく親戚付き合いをしないと不満を述べられた。

#17では祖父との面接が実現した。祖父は整理整頓が信条で、孫にもそのようにしつけないと思っていた。孫は本当に可愛くて、自分の子（父）より可愛い子だった。孫の友達が遊びに来て、植木を壊したり家の中を散らかしたときは注意したが、別に孫は委縮する様子ではなかった。母親が「子どもは散らかすものです。少々のは目をつむっ

て下さい」と言っていた。

決定的だったことは、4歳ころ、祖父が蟬を捕ってやろうとしたとき、「自分でやりなさい！」とA男に対して母親が横槍を入れてきた。それ以後、何かにつけて母親がクレームをつける。A男が祖父の部屋へ来ると、母親がすぐにブザーを鳴らして呼び戻す。A男の妹までが、「おじいちゃんとお母さんは喧嘩している」と口にする。

A男が、話し辛らそうにするのを見て気の毒に思い、こちらからは話しかけないようにしている。孫が喋らんということを聞いてから、よけい家の中が悪化している。

#18<X年12月1日>：

久しぶりに動作法に誘うと、あまりやりたくないような素振りを見せたが、応じてきた。『軀幹捻り』では、要領を覚えたのか、すんなりと肩から胸や背中中の力を抜いた。援助の方向を下の腰に向けると、以前のように「痛い！痛い！」と声を出すことはなかったが我慢している感じである。＜痛くない？＞「うん、少し」という受け応えであった。まだ、腰周りの弛緩は不十分な感じである。自分から発話することはなく、聞かれたことに応える発話のパターンは変わっていない。

左側は、右よりもすんなり弛めることができた。坐位で肩反らせをすると、頸を反らせるように構えてくる。右肩の方がやや硬い感じがする。頸を戻させて繰り返すと、頸の反りは出なくなった。以前は肩を触るとくすぐったいという素振りを見せていたが、すんなり応じて過敏な反応は見せなかった。何となく逞しくなったような感じを受けた。2、3回ほど繰り返すと、右の方も弛めてくるようになった。

#19<X年12月15日>：

援助者がプレイルームに行くと、一人で『トンネル潜り』の用具に入っていたので、援助者が出入り口を塞ごうとしてちょっかいを出すと、「やい！ばかやろう！開けろ！」と、今まで聞いたこともないような大声で真剣な表情で怒り出した。＜ごめん！ごめん！＞と謝ると、すぐに和んだ表情に戻った。

動作法に誘って、『軀幹捻り』から始めた。右捻りでは、しきりに腰に手を当てて「痛い！痛い！」

と言う。胸や背中もジワーとした感じの慢性緊張が入っている。2、3回ほど元に戻して繰り返して弛める練習をするうちに、随分と弛んできた。左捻りはすんなりと弛めることができた。その後、右の尻（股関節部）の緊張が気になったので、うつ伏せ姿勢にさせて、尻を上げ下ろしさせる動作を提示した。指示にしたがって上げ下ろしする動きは、特に問題は感じられなかった。ただ、出尻に感じられたので、そのまま尻を押し込むと、やや右尻が硬い感じがする。脚を少し持ち上げて、出っ張っている右尻の方を押し込みながら弛むのを待っていると、そのうち自分でもわかってきたのか、尻に入れていた力を抜いてきた。『肩弛め』は、やはり右側が少し硬い感じがする。上げ下ろしや反らせの方向に動かさせながら弛める練習をすると、徐々に硬い感じが取れてきた。以前のようにくすぐったがったり、逆の力を入れてくることはなくなった。全体に慣れてきている感じがした。

#20<X年12月22日>：

本日の相談に先立ち、小学校の担任からマラソンの練習で、A男が着順を報告するときに「〇〇番」と、声に出して喋ってくれたという報告を受けていた。また、最近になってクラスの活発な男の子と付き合うようになり、その子がA男の家に遊びに行っているようで、放課時にもその子を中心にして、A男もお喋りをしているとのことである。11月のマラソンの練習以来、授業中で音読の順番にも、以前は口形のみのやり方で声にはならなかったが、最近は小さい声ではあるが、ちゃんと声に出して読むようになっているという。

相談室に来るときから、ドッジボールをやるつもりでボールを持って部屋に入ってきた。＜じゃあ、あっちの部屋でやろうか＞と言うと喜んでついて来た。とても嬉しそうに投げってくる。ボールのやり取りのときは真剣で、話しかけても、「うん！」と言うはっきりした返事が言えた。15分くらいで汗をかき、セーターを脱いだ。

動作法では、『肩、胸、背の弛め』を坐位で行う。右肩の慢性緊張が少なくなり、左とあまり変わらないくらいに弛んでいた。『胸屈指』も、＜力を抜いて！＞という声掛けに合わせて弛められ

るようになった。『上体反らせ』での背の弛緩では、援助者の当てた腕に身を任せるようにしてやる。＜楽ですか？＞「うん」＜もっと力を抜いて＞「うん」という感じで、素直なからだの応え方だった。その後、臥位で『軀幹捻り』を行う。指示に従って＜ここを抜いて！＞に合わせて力の抜き方がわかってきたのか、逆に戻そうとする力の入れ方はなくなり、「痛い！痛い！」を連発していた前回までとは違って、自分で力を抜けば痛くないということがわかってきている、と援助者には感じられた。

＜母親面接＞

学校の担任から、少しずつ喋り出したという報告を受けている。本人も、「もう（ここに）来なくてもいい」と言っている。私も、祖父がここで私たちの悪口を言っていると思うとあまり気分が良くない。家のことは、来年が易の上で良くなるので、それを機に（祖父母とは）別居をしよう（夫と）話し合った。次回を最後としたい。

＃21＜X年1月12日＞：

動作法は行わなかった。A男は、プレイルームで一通りのあそびを済ませるようにして椅子に戻ってきた。母親には、何かあったら何時でも相談に来て下さいと告げ、担任と連携をとっていくことの必要性を話して終結した。

2）経過のまとめ

祖父母と母親との家庭内衝突という構造の中で、A男は『外に出るとスイッチが切れる』という自動感（喋るスイッチが自然に切れるというA男自身の感じ）で場面緘黙の症状を呈している。一方、面接に対しては「僕は、どんな偉い先生でも喋らない」という意識した選択性の自動感（喋らないぞ、という主体的な構えの感じ）も持っている。

以下、動作法を実施したセッションから見えてくることをまとめると、＃7で、初めて援助者と対面したA男は、母の後ろに隠れるような素振りで緊張していたが、半年前からプレイルームでの遊びには慣れているらしく、付随的な関わり方で接する援助者を特別拒否することもなく受け入れた。そこでの様子は、活動的に身体を動かすことは好きようで、自転車のペダル漕ぎやボール投

げ、箱庭作り、白ボードへの自由画描きなど、好きなように次から次へと活動をしていた。ときどき口を挟む援助者に対しては、頸を振ったり肯いたりする動作で応じている。その対応は素直で、普通の子供らしさが感じられた。ただ喋らないだけだった。

＃9で動作法に導入した。臥位での弛緩訓練から始めると、A男は身構えるような力の入れ方をし、また『軀幹捻り』では援助者の援助の力に反発するような逆の力を入れてきた。これが腰の痛みとなって感じられたのだろう。それに耐えようとしたA男は、思わず「ウッ！」という声を出しそうになるが、我慢して（意識して）声を出さないように努力している。このやり取りから、援助者は、この子は『からだ』でちゃんと反応し、応答していると感じた。「ウッ！」という声にはならないが、声が出そうになったその時点で選択的な意識が働いて、グッと我慢してしまったのではないかと、その腰に当てている手の感じから咄嗟に推察できた。さらに、『からだ』で応答したその咄嗟の即応性からは、この子は『からだ』で喋り出すのではないかという予感が援助者には感じられた。また、坐位で肩を弛めようとして触ると、すかさず頸や肩を窄めようとした仕草からは、過敏な感覚の持ち主であることが窺えるし、その『からだ』の緊張の仕方や動きは、まさにA男そのものであると感じた。

＃10では、近所のあそび仲間の友達と一緒に臨床動作法での『からだ』の活動を、半日常的な雰囲気の中で行われている。したがって、そこでは普段どおりの心性が出やすかったのかもしれない。嫌だと感じている動作法の課題から、一端はふざけ半分で逃げ出そうとし、咎められて笑いながら戻ってくるという、場に適応した行動をとっている。さらに、動作法の『軀幹捻り』の課題では、先に行った友達が自然に＜痛い！痛い！＞と声に出しているので、A男自身もグッと押さえ込んで口を噤まなくても良いという心性が働いたのかも知れない。経過のとおり、「痛い！痛い！」と声に出し、それに続いて＜どこが痛いの？＞の問いに対して、「ここ！」と、腰を押さえた動作はまさに、『からだ』が応えた自然な応答であろう。

自然な応答の後に、声を出さないという不自然な応答はできにくかったのか、それとも、自然に喋ってしまっただけからは、もうばれてしまったので意識的に声を出さないということをする必要がなくなったのか、A男に確認してはいないが、とにかくここからはちゃんとした声に出してのコミュニケーションが援助者との間で成立した。

その後は、動作法は行わずにプレイセラピーの内容で推移し、#18から#20までの3セッションで再び動作法を取り入れている。このときは、既に学校でも喋るようになっていた。

#18では、『肩弛め』の援助に対してくすぐりたいという過敏な反応は示さなかったが、肩を反らせようと援助すると、頸を反らせるという随伴緊張の構えが出ている。しかし、一方で嫌な『軀幹捻り』にも応じる逞しさが感じられる。

#19では、自分で尻を浮かせている力を抜く、という自己弛緩の要領がわかってきて、#20では、『上体反らせ』の背中弛めで、援助者の腕にA男自身の身を任せるという、相手に対する素直な『からだ』の応え方の体験をしている。

蛇足になるが、本事例は都合で援助者が途中から関与したものである。したがって、それまで関わってきた前担当者の相談内容を踏襲していこうとした援助者の意図が働いていたため、すべて臨床動作法のみでの援助ではない。#9と#10で動作法を用いたが、A男がセッション場面で喋り出したために、それ以降はA男があまり乗り気ではない動作法を提示せず、A男の遊びたいという意向を尊重したプレイルームでの活動で経過している。終結に近づいた後半は、援助者がA男の動作を確認したかったために、再度A男に提案して、嫌がってはいない感じがしたため、実施している。これらの面接構造については、ケース研究としては検討する必要はあるが、本論では動作を介した『ことば』『からだ』を論旨に置いたため、母親面接および父親・祖父面接も含めてここでは考察しない。

IV 考 察

A男の緘黙は、大井(1979)によると、タイプ

Iのコミュニケーションの手段としての緘黙に相当すると考えられる。A男は、「喋る」ことは拒否しているが、表情や仕草において多様なメッセージを援助者に送っている。家族や友達に対しては自由に、むしろ多弁なほど多く喋るのとは対照的に、幼稚園や学校という場面ではまったく喋らない。それは、まさに家族や友達以外の者が自分をどのように評価し、受容してくれるのかという不安の強さを物語っているのだろう。喋らないことは他者に攻撃されることもなく、また厳しい評価に自己がさらされることもなく、そうした自己が脅かされる場面を回避するための防衛手段であったという考え方が成り立つ。しかし、A男は不登校児のように社会的な場から退却し家庭に逃げ込むことはなく、不思議なほど社会的な場に一応の出場はしている。学校を欠席することはほとんどなかった。そこに不登校児とは異なった自我の強さを感じる。また、家庭以外では懸命に自己を防衛している。そのために周囲の状況に対しては無関心どころか、過敏なほどに耳と目を働かせている。したがって家庭外では、強い緊張状態にあるものと予想される。また、それだけに他者に対する攻撃感情や不安感、深くA男の中に押し込められたものとなっていることも想像に難くない。

こうしたA男の相談に対して、前任者はプレイルームでの遊戯療法を主として取り入れ、A男にとって自由な場を保障し、セラピーの中でA男を支えてきたと考えられる。引き継いだ援助者も暫くはそれを踏襲し、その後もそうしたプレイの場を保障した。次の課題は、現実的な生身の人間との間の中で、過敏な緊張感や攻撃的感情、自己の内部に押し込めていた感情や不安感をセラピーの中で表出しても安心であるという、「現在只今と此処」での体験が必要であると援助者は考えた。幸い臨床動作法は、こうした今の体験のイメージ感を『からだ』で表現していることを前提(仮定)に引き受けている。その上に立って、今までの様々な感情やイメージ感を、その場で援助者の課す動作課題を解決する努力の過程において、自己の統制の基に新たな感じ・イメージ感に作り変えることが可能であるという仮説に基づいている。言い換えれば、課題を達成するために新たな努力をす

る、その体験の感じ・イメージ感の体験の感じを『からだ』で感じるにより、今までとは違ったより現実的、より適応的な体験がA男の生活上の緊張場面での変容を来すのではないかと見立てた。

事例では、#9で既に「うー」という声にはならないが自然な『からだ』の応えをし、#10では、はっきりと「痛い！痛い！」と声に出した応えは、まさに『からだ』が発した応えである。援助者に『軀幹捻り』の課題を提示され、逃げられずに真正面から抵抗して入れた反発の力が、自分の『からだ』で「痛い！痛い！」と体験したのである。しかも、<どこが痛い？>と当てた援助者の手や大腿に対して「ここ！」と即座に回答したA男の肩や腰とのやり取りは、『からだ』が『からだ』に聴いて、『からだ』が『からだ』で回答したコミュニケーションといえる。

その後、A男は自分で自分の緊張部位の力を抜くという難所を乗り越える体験を通し、それが楽になる『からだ』を体験している。さらには相手である援助者に自分の『からだ』を任せる体験をし、身構えることなく安心して相手に対峙できる体験に繋がっていったと考えられる。これは、相手である援助者の意図がわかり、援助の力や援助の方向がA男にわかったということの裏返しでもある。このことは、わかるから安心して身を任し、わからないから不安で緊張しているという言い方にも繋がる。援助者もわかるから、ここぞという難所で手を当てて待ち、わからないから対応しきれないという構図が成り立つ。

以上は、セッションでのやり取りの謂いであるが、では何故それが日常の学校場面で喋るようになっていったのか。成瀬（2000）は、動作をやっていくそのほかに、それに伴っていろいろな体験をする、その伴う体験が緊張の感じ、弛む感じ、自分のからだの感じ、姿勢の感じ、自分が動かしているんだという感じ、等々を挙げ、その伴う感じが生活動作体験をより確かなものにし、その生活体験動作ができてくると、生活体験が変わっていくと述べている。生活体験は、動作から少し離れて、自分自身の生きる感じの体験であるとして、動作感とか主体感とか主動感などの原初基底体験

を、生活の基礎としての弛めるとか、動くとか、踏ん張るなどの生活基礎体験を経て、さらに自己感・自己像・自己活動感・自己存在感などのような体験が得やすいように援助することを強調している。

当初、A男はプレイルームでボール遊びや自転車のペダル漕ぎ、箱庭作りなどの活動を通して、それなりの自己表現をし、援助者に受容されるという日常場面とは異なる体験をしてはいる。しかし、臨床動作法での介入により、自由気ままな活動から一変して、援助者の指示する課題を遂行しなくてはならない場面に遭遇した『軀幹捻り』で、援助者の指示に対峙している自分の『からだ』が、指示とは逆の反発・抵抗する力として働いていることに直面させられ「ウッ！」と声にならない『現在只今』を感じている。どう対処してよいかわからないが「痛い！痛い！」とからだが出す。<どこが痛い？>に対して即座に「ここ！」と腰部に手を当てるというやり取りに繋がる。このことは、『からだ』の体験がそのまま『ことば』になり、援助者とのやり取りを動作でしながら、『ことば』でも呼応するという極めて原初的な基底体験をしていることになる。

また、それ以後のセッションにおいても、指示された課題に応じて力を抜く、上体を援助者に任せるという基底体験をとおして、自分で力を抜けば痛みが解消される体験、人前（ここでは、援助者の前）で構えている『からだ』の緊張を課題動作により指摘され、それを能動的に弛めることによる能動感や、援助の意図がわかって、自ら課題達成の努力をしながら現実検討をしている努力感の体験をしていることになる。さらに、援助者に身を任せて自分の『からだ』の緊張を自己弛緩することや一緒に課題動作を遂行することとおして、援助者と共同作業をしている体験もする。

セッションでのこうした体験は、今までの意識的・無意識的な緘黙という防御壁への回避や対人への身が構えの体験様式とは異なった、新たな能動的・現実適応的体験様式を遂行したことになる。

こうしたセッションでの体験の仕方の変化が、日常の学校での生活の体験様式に影響をし、徐々に学校でも喋るという現実適応的な生活体験様式

に変容したのではないかと推測できる。自動感としての緘黙が主動感・能動感で喋るように変わったのである。

援助者とA男の双方が「わかる」というコミュニケーションに関連しては、既に#9の初めて動作法で紹介した『軀幹捻り』の場面で、A男が「ウッ！」と声を出そうとしたとき、援助者はA男の腰を援助者の大腿でブロックしていたが、その接している援助者の大腿の部分とA男の肩に当たっていた援助者の手の両方から、A男が援助に反して力を入れて反発しながら、なお且つ我慢して耐えている感じが伝わってきており、さらに「ウッ！」と声を出しそうな表情、頸や上体の緊張も追加されて、〈ああ、A男の『からだ』が「ウッ！」と言っているな〉と感じている。さらに、〈この子は、声を出す〉と感じた。

#10でA男が、「ウッ！」と実際に声を出したときも、援助者は〈出すだろう〉と感じている。続いての「痛い！痛い！」も同じである。これは、おそらくA男の『からだ』と援助者の『からだ』が対峙して、そこでの動作のやり取りが『声やことば』と一体に推移していたのではないかと推測している。『からだの声』とでも謂うような、即時的な動作の一環の中で生起している声だからこそ、動作としての声が援助者には〈わかる〉のではないだろうか。

竹内（1975）は、「普通の健康な人々にとって、かれらが『ものごころ』ついたとき、かれらは目で見、音を聞き、手でつかみ、脚で歩くことができる自分を発見する。『からだ』としての自分をかれらは発見するのだ。と同じようにその時期にかれらは、ことばが話せること、自分の発する音声が相手によって了解されうることを発見する。つまり、ことばは、気がついたとき、すでにからだの一部として、ある、あるいは成り立っているのである。・・私のように、障害のあったものを除いては、ことばは意識的操作として発せられるものではなく、食べるとか眠るとか同じように無意識にうながされて発する動作であり、意識はあとから、それをコントロールするだけにとどまる。これが主体としての人間にとってのことばの本来のあり方だろう。すれば、ことばもまた『か

らだ』としてとらえられねばなるまい。（※下線は筆者による）」と述べている。これを、A男とのやり取りに当てはめれば、A男に働きかけた援助者の『軀幹捻り』の援助の働きかけは、そのときA男の『からだ』の内に援助者の動きに対応して自己を触発させる動きが芽生える。そこで「ウッ！」と『からだ』がうなり、声を発する。その体験こそ、『ことば（動作）』がわかるということの謂いになる。援助者とA男の『からだ』は、その一部として既に共通の『ことば（動作）』を保有しており、その意味で根源的に共生しており、その共生の内での一つの波動が他の『動作（ことば）』を結実させる。

成瀬（1995）の謂いを用いれば、援助者が自らの『からだ』に内動（※内言に準じた表現で、相手と同じ動作をしようとするからだの模倣を指す）としてA男に合わせた同じような緊張や動きをさせるといふ共動作を試みながら、A男と同じような体験、すなわち共体験をすることにより援助者にA男が『わかる』、となる。つまり、動作をとおしてのコミュニケーション（成瀬：1984）のループで『わかる』のである。

一方、浜田（2009）は、ことばは対話的關係を単位として成り立つとして『対話的ゲシュタルト』という独自の表現を使用している。人と人との間で交わされることばは、身体から身体に向けて発せられるものであり、身体間の現象であって本来が対話であると言っている。つまり個が単位ではなく、身体間の関係自体を一つの単位として捉え、関係性の中で、こうした関係の原初的な単位性を人間現象の記述で重視すべきだと言う。

援助者とA男との『からだ』でのやり取りは、それ自体が相互の受動・能動のやり取りをする対話的原初の単位であって、「痛い！痛い！」と発し、〈どこが？〉と尋ね、「ここ！」と腰に手を当てる。その相互性自体が人間現象の原初的基底であり、『ことば』も『動作』も『からだ』で発する原初的対話の具体的な一単位であるといえる。

浜田流に言えば、喋るという対話も喋らないという対話（緘黙）も、共に関係性のゲシュタルトと言える。

【文 献】

- 浜田寿美男（2009）「私と他者と語りの世界」,
253-254, ミネルヴァ書房.
- 角田圭子（2011）場面緘黙研究の概観—近年の概念と成因論, 心理臨床学研究, 28(6), 811-821.
- 川崎克哲（1992）緘黙症, 氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕 共編「心理臨床大辞典」, 775-776, 培風館.
- 河野文光（2001）外に出るとスイッチが切れる少年, 教育臨床事例研究5, 131-146, 愛知教育大学教育実践総合センター.
- 成瀬悟策（1984）動作法の心理. 成瀬悟策編「障害児のための動作法」, 205-232, 東京書籍.
- 成瀬悟策（1995）「講座・臨床動作学 1 臨床動作学基礎」, 学苑社.
- 成瀬悟策（2000）臨床動作法の理論. 日本臨床動作学会編著「臨床動作法の基礎と展開」, 13-30, コレール社.
- 西部美志（1992）言語療法, 氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕 共編「心理臨床大辞典」, 372-375, 培風館.
- 大井正巳（1979）緘黙症. 「現代のエスプリ別冊 子供の心理」, 97-116, 至文堂.
- 竹内敏晴（1975）「ことばが劈かれるとき」, 240-241, 思想の科学社.